

## 【誌面の刷新と新企画の開始にあたって】

### 新連載「実践に学ぶ」「発達保障のために学びたい本」

#### 発達保障の実践や研究が、時代を越えて引き継がれて行くために

本誌編集委員長 白石 正久

#### 「理論と実践の統一」をめざして

『障害者問題研究』は、全国障害者問題研究会（全障研）が発行する研究誌として、1973年に創刊されました。創刊にあたって、当時の全障研委員長であった田中昌人氏は、「科学が科学として築かれることになる専門誌」として期待すると寄稿しています。

全障研は、その規約において「障害者の権利を守り、発達を保障するために、理論と実践を統一のとらえた自主的・民主的研究運動を発展させることを目的とする」と定めています。そのため本誌は、障害のある人々の発達と基本的人権を保障するための理論の成果と課題を普及し、批判的な検討を仰ぐ機会としてきました。発達保障の目的意識をもった研究が、科学の名に値し、かつ科学の進歩そのものに貢献できるように、多くの研究論文を掲載し続けてきました。

それとともに、「理論と実践の統一」をめざして、障害のある人々のための教育、保育・療育、社会福祉、医療の実践（社会変革的实践としての運動を含む）の報告を、特集テーマにそってとりあげてきました。実践とは、人間を含む自然と社会に対し、目的と仮説をもってはたらきかけることであり、その対象を変革していく人間の活動のことです。実践を通じて対象への認識を深め、仮説や活動方法の正しさや妥当性を検証し、科学的事実と真実により近づいて行くことができます。ともすると実践が理論に従属し、あるいは逆に理論を軽視して実践に偏重する傾向が生まれがちですが、全障研は、実践を通じて理論を検証し、その理論

に導かれて実践も発展していくという「理論と実践の統一」を大切にしてきたのです。

#### ふたつの連載企画のねらい

発達保障の実践が、若い世代に引き継がれつつある今、本誌は、あらためて実践研究の意義、実践を記録・分析・記述する方法、研究をすすめるための集団のあり方などについて、若い世代とともに学びあうことのできる連載「実践に学ぶ」をスタートすることになりました。その学びあいのヒントを提供するために、研究者によるコメントを付して掲載します。実践報告は、全障研全国大会の分科会などで行われているように、集団的な討議を経て深められます。ここで紹介する実践報告は、手本というよりも、集団で検討されることを通じて、実践を前に進めるための多様な手がかりを提供してくれるテキストとなることでしょう。

もう一つの新連載は、「発達保障のために学びたい本」です。ここでは、発達保障の思想や実践・研究の草創期において多くの人々に愛読され、その人々の実践や運動を通じて生命力を発揮してきた著作について、その内容を紹介し、学習の手引きとなるような解説を試みます。障害のある人々が、教育権すら保障されず、労働の場もなかったとき困難に立ち向かうために形成された思想と理論、手をつなぎあい生きる姿勢を、時代背景への想像力を逞しくしつつ学んでいきたいと思ひます。この連載も、悩み苦しみながら前を向いて歩いていこうとしている読者の実践のなかで、生きて働く力をもつと確信しています。

（しらいし まさひさ）